



八月号
発行所 財団法人全日本仏教会
東京都中央区築地三ノ木(本願寺内)
電話 54033三
発行人 栗本俊道
編集者 高橋忠雄
印刷所 栄昌堂

終戦十三年を迎えて

梅雨期を終つて、いよ／＼本格
的な酷暑を迎えようとしている。
カラ梅雨といわれ、殆んど降雨の
なかつた雨期を終つたとたんに、
颯風の襲来を受けて全国各地に相
当の被害を出して人々を驚ろかせ
た。水不足で米作が心配されたり
したが、こう一度に大量の水の補
給を受けてはたまらない。各地で
豊作が予想されるだけに、九月の
颯風シーズンに対する不安が大
きい。人間の力は未だこのような
自然の脅威の前には余りにも微力
だといわなければならぬ。

不安といえば、最近の中近東情
勢は、大戦争の危機をはらんで、
世界中の人々を不安の渦に追いや
つてゐる。現代では既に、われわ
れからいくら遠く離れていようと
も、この地球上で起る戦争は、直
接にわれわれの生命に関わる問題
であるといわれており、それ程に
世界は狭くなつており、人々は近
くなつてゐる。しかし、われわれ
は、自然ののがれ得ない脅威の前
に不安にさらされると同じように
戦争の危機の前にさげがたい不安
におの／＼かなければならないの
だろうか。決してそうではないだろ
う。

して単に危険の増大のみを意味し
てゐるのではないだろう。それど
ころか、われわれ人類は、それど
け相互の理解を深めやすくなつて
おり、それだけ平和を確保する条
件も具わつてゐるとみるべきでは
ないだろうか。

われわれは去る六月、恒例の大
会を成功裡に終了した。われわれ
は大会において、現代における教
化対策、社会問題、国際問題等
についての研究討議を通じて多くの
決議を行つた。われわれはこの場
合たゞこれ見よがしに決議を行つ
たのではなく、その根底には人々
の仏性に信頼し、こゝに仏国土を
招来せんとする信念のもとに会同し
たのである。このことは、自然
の脅威に対しては兎も角、人類の
危機一戦争は、人類の精進によつ
てさげ得るとの確信に連なるもの
でなければならぬであろう。

禁止のための精進を誓つてきた。
しかし残念なことに、この決議が
本当に守られ、実行されていると
は言いがたい。
われわれ仏教徒は今こそ現代の

旧境内墓地返還要請について

関係衆参両院議員有志懇談会ひらく

かねて全日仏内に「墓地問題特
別委員会」を設置して、旧境内墓
地の返還要請に努力を続けて来た
本会においては、去る七月一日委
員会を開催し、直接問題を惹起し
てその解決に全力を傾注してお
る、仙台市在任の委員よりその後
の経過を聴取し、今後の運動のす
ゝめ方を協議した。

その結果かねて本問題に関心の
深い衆参両議員並有縁の議員各位
の参集を求め、本問題の善処方を
要請すべく懇談会を開催すること
に決定した。

閉会を直前に控えて多忙な議
中ではあつたが、愛知法務大臣、
大谷よし雄議員、坂田道太文教委
員長、三浦義雄の四氏が中心とな
つて種々配慮された結果、七月四
日午後二時より参院常任委員長室
において懇談会を開催するはこび
となつた。

当日は院内的に多忙な折であつ
たが、大谷よし雄、大谷登潤、三
浦義雄、木村篤太郎、中野文門、
坂田道太、小柳牧衛、愛知院(一代)
等の各議員出席のもとにこの問題
が討議された。

先づ大谷よし雄氏が現在まで開
係して努力された世話人として換

世界の危機をはつきりとつかみ、
これを克服して平和を顕現する上
での仏教徒の使命と責任を明らか
にしなければならぬのではな
らうか。

抄し、次いで佐瀬総務局長が本会
を代表して挨拶にあわせ問題が全
国的な問題として宗教法人運営に
重要な意義をもつものである点を
強調し、更に横山委員より明治時
代よりの墓地の変遷と今回仙台市
において惹起された問題点等につ
き詳細な説明がなされた。

これに対し、各議員は配布され
た「旧境内墓地返還要請書」を参考
に種々活発な質問がおこなわれ
この問題は全国の未処理寺院の現
状のデーター(曹洞宗)からして
も研究調査する必要があるから、
参院文教部会において関係当局の
出席を求め調査を進めることにし
たいという結論を得て、当日の懇
談会を終了した。

これによつて運動は更に一歩前
進したのであるが、更に本会とし
ては、全国各宗派当局、都道府県
仏教会に対し、全国寺院の墓地の
現況のデーター並にその資料の収
集等を依頼した。

これらの有力な材料を土台として
この運動を強力に展開し、全国関
係寺院の問題解決のために成功を
おさめるまで努力する決意であ
る。

明年度全日仏会議 秋十月知恩院で 関西運営委で決定

才六回全日本仏教会議最終日に
緊急動議として提案され可決され
た明年度大会々場に関しては、関
西事務局長であり知恩院の執事長
である干々和宝天師がその旨を含
んで帰り京都各方面の情勢を検討
中であつたが去る七月七日全日仏
関西運営委員会を知恩院で開き協
議の結果左の通り決定を見た。依
つて明年度大会は今からその盛會
が予想されている。

◇期日 昭和三十四年十月廿二日
〜廿四日
◇場所 京都、知恩院華頂会館

原水爆禁止大会に参加

去る二月東京で設立總會を開い
た「原水爆禁止宗教者懇談会」は
その後、毎月例会を開いて、禁止
運動推進のため、宗教団体相互の
理解と協力を深め合つてきてい
る。

また本年才四回原水爆禁止世界
大会は来る八月十二日より開かれ
「宗教者協議会」がもたれるが、
全仏も代表を送つてこれに参加す
ることゝなつた。なお、この大会
には本会加盟の日蓮宗、日本山妙
法寺、近代仏研、増上寺、浅草寺
浅草仏教会等の参加が予定されて
おり、活躍が期待される。

大会決議具体化のために 各専門委員会開かる

組織委員会

組織委員会は七月四日午後二時より築地本願寺会議室で開かれた。冒頭に栗本局長挨拶をなした。次で本委員会委員長木船全能氏、曹洞宗庶務部長退職に付之が後任に付一同にはかりたる所全員の賛同を得て木船氏の後任者たる別所竜城氏が委員長に就任した。同氏より簡単に就任の挨拶が行われた後議事に入った。

先づ才八・九号議案の決議に對する検討に入る。之は全日仏の地方出張所設置と地方活動強化の爲に仏教讚賞袋を配布する件である。前者に對しては関西事務局は別としてその他の地区に出張所を今直に設ける事は色々の關係で相當の困難性がある故今しばらく静觀をしたらどうかとの意見が強く出た。

仏教奉讃袋(献金袋)についてははすで三、四の地方仏教会でも実行している(東京都、京都、茨城等)ので更に希望仏教会は本部と充分連絡して実施した方がよいという事になった。

才十一号才十七号議案に付ては大体決議通り原案を尊重し、現存の地方組織の在り方に立脚して開拓してゆくよう事務局は努力すべきであるとする事になった。但組織に血を通わせる方策に關しては真剣に今後本委員会でも研究しようとする意見が強く出た。

才二十九号議案の仏教徒としてのマス・コミ対策に關しては決議通り今後共仏教者として現代マス・コミの実態を充分不断に研究す

ると共に消極的対策(抗議運動)にのみ陥らず積極的に之を利用し参加して以て仏者の正法道場に努力すべきであるとし、今後委員毎にこの問題に關しては色々研究討議を重ねてゆこうと云う結論で散会した。

尙当日の出席者左の通り
別所竜城(曹) 今井祐申(天台)
安藤寿雄(新潟県仏) 椎谷健(孝道教団) 桜井栄章(同志クラブ)
米山久、船口暉子(仏婦) 太田総長、栗本、高橋局部長

社会・平和委員会

才六回大会の決議事項についてその具体策を協議するための社会平和委員会が去る七月三日午前十一時より東京築地本願寺において開催された。

委員会は、大会決議のうち本委員会に附託された、或は本委員会で当然取り上げべき各項について逐次協議研究することとして、最初に全一仏教運動の「綱領」作成問題について討議した。

この具体化のため特別に委員会を作つてはどうか等の意見が出された。

次に平和運動、特に原水爆禁止問題に關する決議の具体化について協議したが、日蓮宗提案の平和の開催についてはこれを実行することとし、そのための具体的準備のために小委員会を設けることが申合された。また、平和問題、特に原水爆禁止問題については社会平和委員会とは別個に「実行委員会」を設置することの必要も確認された。なお、代表者会議は出来れば八月(原爆投下を記念して)に開くべきだとの意見が出された。

最後に勤務評定問題に關して協議したが、これは大会決議の通り教育問題一般について常に本委員会としても関心をもつて考究することとし、今回の動評問題について特別な処置(声明書や具体的な働きかけ)はとらないこととし、なお当日の出席委員は

山本洋一、狩野慶麟、壬生照順、森 芳俊、中濃教篤、丸井玄信、常光浩然の各氏及び局部長。

教化・教学委員会

大会後初の教化・教学委員会は去る七月四日午前十時より築地本願寺で開かれ、権藤円立、石藤完夫、北村大栄、高崎直承、石上昭然、川田聖児、深井恵直、小笠原義雄、堤敏郎の各委員が出席した。

委員会は、大会決議の具体化について協議したが、道徳教育の問題については、今日の重要問題であり、各宗各団体での教化資料を蒐集することから着手し、全仏に

おいてこれに基いて考究を進めることになった。また、これとも関連して考えられるが、近代的仏教文化の振興、これは仏教が現代人の生活に即して生かされる意味で非常に重要なことが指摘されたが、近代乃至現代と云うもの、根本的な把握の必要が指摘され、これについての考究がやがて、仏教を本當に生かすことになり、その意味での本問題の解決に努力を続けることを確認した。また、青少年に對する教化対策についても、仏教がわが国の民衆の生活の中で生かされるためには、真剣に考究されるべき問題であり、青少年教化の講習会や、地方への講師派遣などについて全仏で準備を進めることになった。また、仏教幼稚園や保育園の教職員への仏教的教養の問題についても、講習会や要綱の運用等について出来る範囲内から実動に移るべきことが指摘された。その他マス・コミ対策等についても本委員会として常に関心をもつてゆくことを確認した。

国際委員会

国際委員会は去る七月三日午後二時から築地本願寺特別室で開かれた。開会の挨拶に次で石川局長から左の各項に付て報告がなされた。

- (1) ブラジル日本人移民祭(大谷重永代表出席の件)
- (2) ネパールのアマリタナンド長老来日の件(六月七日)
- (3) ハンガリヤ仏教会へ念珠とザルコマイシン贈呈の件
- (4) ハンガリヤ仏教会へ贈る聖觀音像完成の件
- (5) セイロン長老マハーナーマ長老来日の件(六月廿二日横浜港着)

(6) 才五回世界仏教徒會議に派遣する日本代表推せん方依頼状を各宗団、団体及び仏教会への発送件
(正代表五、オブザーバー七と限定されているが目下タイ仏教会側と増員の件交渉中)

(1) インドネシア大統領領來日に付之が歓迎會に關する件
大体九月廿九日正午から一時間位京都で開く事に決定、詳細は事務局で具体化する事
アマリタナンド長老歓迎の件
七月九日十一時築地本願寺で各關係者を招集して行方事
浅草寺大会決議事項に關する件

才四号議案の世界會議に南北両仏教界の學者による討議時間を充分用意すべく全日仏からWFBへ勧告すべきである。之は早速決議通り今回の大会準備會が生れると同時に之にはかつて大会へ提案する事に決定した。

仏教英訳會の結成(才七号議案)に付ては原案通り今後全日仏でも不断的努力を擡げて目的達成に邁進したい。又各方面でも極力之に協力すべしとの結論に達した。

その他才十二号、才廿六号、廿七号、議案は夫々大会決議を尊重して今後全日仏でも努力を続けてゆきたいと云う結論であつた。但才三十二号の世界各國の憲法に戰爭放棄の宣言を採録するようには要請しようとの議案に付ては仲々活潑な意見がかわされたが結局は各國の内政干渉にならぬよう又仏教徒としての要請としては當然の事であるから更に充分慎重に研究討議を続けてゆく事を申合せで散会した。

尙当日の出席者左の通り
伊藤述史、阿部竜伝、久保田正文、木村日記、中山理々、岡野貴美子、村野宜忠、小谷徳水、桜井栄章、藤井真水、中濃教篤、堤 敏郎、壬生照順、友松円諦、広瀬スミ子、太田総長局部長

大会反省会 眞剣に行われる

七月一日
議運中心に

才六回全国大会の議事の運営に
当つた十一名の委員全部を招いて
の反省懇談会は去る一日午後二時
かり本部事務局で開かれた。

白見、小野塚、矢野委員を除い
て全委員出席し高橋部長の司会で
約三時間に亘つて大会舞台裏のは
なしから総会部会での苦心談、大
会の本質的反省等談笑裡に進めら
れ非常に有効であつた。本部から
も栗本、佐瀬局長、柳、別所、高
橋の各部長出席し、夫々意見を述
べあつた。主なる意見左の通り

(1) 地方仏教徒会議を振興せよ
中央大会も結構だが仲々之に参
加出来ない多くの人々のために又
地方仏教運動を推進するためにも
も全国主要の処で地方仏教徒会議
を開催するよう努力せよ。その形
式内容に関しては夫々の地方色を
盛り込んだものとして早速今年か
ら開始してはどうか。

(2) 「全一仏教」の意義等云う議
論に余りとられず現実の「全一
仏教運動」の展開にもつと積極的
になれ又全日仏の性格をもつと全
国に知らせる手段をとるべし。

(3) 仏教政見論、仏教者の平和運
動の継続的展開のため全日仏の既
存の委員会だけでは不十分ではな
いか、この際上記の二特別委員会
を作つて理論よりも実動出来る人
を委嘱すべきではないか、等の積
極論が次々とび出して夕刻まで
賑つた。

重永理事長

ブラジルより帰国

全日仏重永理事長は大谷光紹師
と共に、ブラジル移民五十年記念
祭に日本仏教代表として渡泊中であ
つたが去る廿一日帰国。

事務局では廿八日午後局内会議を
開いて理事長不在中の諸報告を行
うと共にブラジル仏教事情に就て
理事長からの説明を聞き、今後の
全仏運動の参考に資した。尙八月
九日常務理事会を開いて改めて款
迎会を行う事になつた。

重永理事長談(要旨)

ブラジルの仏教界の事情は予め
心配されたほどの事はなかつた。
宗派間の斗争と云う事なども過大
に宣伝された傾向があり、仏教各
派共未だ自己の基礎を固めるので
一杯のようた。出先開教師は、大
体に眞剣、且熱心に開教に従事し
ている。

今回の五十年祭記念慰霊法要に
關しても遺憾の点がないでもなかつ
たが、之は最初からデスクトップ
ランとして計画した一部の仲々に
その多くの責任があると思われ
る。仏教者自身の際充分目戒す
ると共に、ポルトガル語をマスター
して本格的開教が出来るよう努
力すべきである。現地の仏教連盟
は最近漸く設立されたばかりで、
未だ組織的活動の段階にまでなつ
てないが多分今後はその必要に
応じて立派な成長をとげるよう祈つ
ている次第です。

マハーナーマ比丘ら帰国

セイロン国コロポボ市金剛寺の
マハーナーマ長老外二名は六月中
旬に來日後横浜持持寺、鎌倉、日
光、善光寺、永平寺、京都東西本
願寺、身延山久遠寺、広島妙法寺
高野山金剛峯寺など有名仏教寺院
などを訪問していたが滞日中の全
日程を終え去る七月廿一日午後五
時頃横浜港より海路帰途につい
た。

なお全仏では去る六月廿八日午
後二時より築地本願寺來賓室にて
同比丘らの歓迎会を開催し國際委
員、常務理事、理事らが出席し日
七親善を深めた

ネパール仏教徒を迎えて

歓迎午餐会を開催

來日中のネパール仏教会長アム
リタナンダ長老同ヴィイマラ令嬢及
び去る七日來日したネパール國の
ムリゲンドラ・ラナ中将夫妻を迎
えて全日仏主催の観迎午餐会が九
日午前十一時より築地本願寺特別
室にて開催された。本会常務理事

理事、國際委員及ネパール大会へ
出席の在京各師約四十一名が参集
して盛大に開催された。石川國際
局長英語で歓迎の辞を述べ参会各
師から挨拶があり終つてアムリタ
ナンダ長老からネパールと日本と
の友情を益々深めたいと述べベラ
ナ中将からもそれぞれ挨拶がなされ
た。
なお当日はロンドン仏教会で活

躍しているカーメン、ブラツカ女
史も出席した。



増永博士著

「日本仏教の先覚」をよみて

「仏教は仏陀の教えであり、仏
陀になる教えでありまたみづから
仏陀であることを自覚する宗教で
ある」との書出して先づインド仏
教の回顧、シナ、日本の仏教展望
を行つた後仏教の日本伝來と聖德
太子の鴻業についてふれ、更に奈
良の六宗、伝教大師の行実、弘法
大師伝とその教学、日蓮、法然、
親鸞、道元の宗教等広く日本の各
祖師の生涯、思想、教学等にふれ
ている。

その文章は極めてわかり易く、
その説き方は親切である。本書は
年來仏教思想史を書くことを希望
していられた著者の前奏曲であり
まわり角に來ている日本仏教に何
ものかをもたらしたいとする情熱
のあらわれでもあると思われる。

私欲に生くるこの世をば、
越えてうれしき喜びを、
ともに分ちて人のため
つくすものこそ菩薩なれ。

と巻頭に記してあることばこそ著
者自身の心境でもあらうか。

特に附録として著者が一九五六
年の晩秋、仏跡(インド、ネパー
ル)巡拝をした巡礼記が旅行記の
形で極めて自然な記述のし方をし
てあるのが、仏教徒たる何人もの
興味を引くものがある。仏跡を巡
拝したものにも、又これから巡拝
するものにも一読の価値あるもの
として推奨する。

書名「日本仏教の先覚」駒大教授
文博、本会教学國際委員、増永靈
鳳著、發行所東京神田町三幸出
版社、三五〇円。

あとがき

才六回全国会議終了後事務局
は総動員で議決の実践具体化に大
意である

七月一日より四日まで毎日午
前午後と二回宛各委員会を開いて
大会決議の諸問題を討議した

中には議論沸騰、会議の部会
以上の熱論さえとび出し整理係り
は汗ダクで記録をとる仕末、御苦
勞さんです

重永理事長が去る廿二日朝七
時半突然ブラジルより帰る、元氣
一杯の頼もしき姿

これではしばらく停頓していた
アジア文化会議やら之に關連する
仏教会の動きも大いに期待される
と云うもの、今しばらく待つて頂
きたい

今年は颯風の当り年との事、
中東問題の嵐も目下無気味な動き
をしている。最近、仏教界の動き
も一息と云うところ、秋風と共に
又々活潑化することだらう

本格的の暑気はこれからと云われ
る、全国の同信の皆さんの御健斗
をお祈りする次第
(九)